

交流・文化施設等運営管理計画検討委員会（第3回美術館検討委員会）次第

日 時：平成23年2月10日（木）

午後1時30分～

場 所：上田市役所3階第二応接室

1 開 会

2 会議事項

（1）事業展開、運営管理の基本的方向性について

①事業計画（事業展開・主な事業内容）について

ア 参加・体験型活動

イ アウトリーチ活動

ウ 広報活動

②施設運営管理体制・組織について

ア 運営管理体制

イ 運営管理組織

③運営管理費計画について

④その他

（2）その他

・今後の委員会開催日程について

3 その他

4 閉 会

（配布資料） 資料① これまでの事業内容ごとの発言要旨

資料② 第2回美術館検討委員会 会議概要

参考資料① 各館のイベント・ワークショップ等

これまでの事業内容ごとの発言要旨

資料①

区分	細目	内容	これまでの発言から	備考
収集・管理活動	収集	・ 郷土作家を中心に作品、文献等の収集を行います	・ 事業方針として、郷土作家の名前を挙げ、これに関連したものを調査研究、収集していこうという意図がある	
	管理	・ 美術作品の管理等を行います		
展示活動	常設展示活動	・ 郷土を代表する作家の作品展示を実施します	<ul style="list-style-type: none"> ・ 郷土作家の思想精神を、今後展開し浸透させその精神の波及に勤めていくということを美術館の事業に反映させていくか。 ・ 調査研究を館の業務として行い、そのための人を充て、予算を確保し、館の事業として載せていくということが出来るかどうか。 ・ 女性は近代教育が今の私たちにどう関係しているか、今日の私にどうコミットしてくれるのか、ということに対して過敏だと思う。 ・ 例えば展示室の説明文に大きなルビをふるだけで、子供のためがあると子供は感じる、「この絵は君は好きかな？」と一言書いてあるだけで、子供は考える。 ・ ナビカードのようなツールの開発も必要。 	
	企画展示活動	・ 本施設独自の企画展示を実施します	<ul style="list-style-type: none"> ・ 思想精神を現代によみがえらせるという大きな目標に沿って、さまざまな企画がなされていくことが、企画展を企画していく大きな柱だと思う。 ・ 暮らすこととアートみたいな柱の企画展など、後継者の育成につながるような、総合芸術という方向にいけるような地盤を計画したい。広い意味での生活と美術というようなものを目指していければ。 ・ コンクールの入選作品はきちんと額装して展示するようにしている。きちんとした形で子供に感動を与えないといけない。 	
	巡回展示活動	・ 県展等の大型展覧会の開催・運営支援を行います		

これまでの事業内容ごとの発言要旨

資料①

区分	細目	内容	これまでの発言から	備考
参加・体験型活動	アトリエ活動	・ 市民が自由に芸術活動を行えるアトリエを貸出します		資料
	ワークショップ	・ 利用者層に対応した芸術活動ワークショップを実施します	・ 教室だけの授業では創造性にかける、土日等でそういった活動があればいいと思う。学校で出来ないものを作って行きたいと思う。	
	市民ギャラリー	・ 市民の作品を公開展示します		
	ボランティア活動	・ 美術館における各種ボランティア活動を支援します	・ 美術会としては、自分が表現していたその力を子供の育成につなげられないか。 ・ 徳島にある大塚国際美術館は来場者3～4人に1人ボランティアガイドがつく。 ・ ボランティアの育成等、こどもにたどり着くまでにはいくつもの段階がある。 ・ 先生のための教室をやる必要がある。	
アウトリーチ活動	出張展示活動	・ 小中高校、福祉施設、公民館等出張展示を実施します	・ 佐久市立近代美術館での「出張まちじゅう美術館」の取り組み。	
	講演会等活動	・ 出張展示に合わせて講演会等を実施します		
広報活動	出版・印刷	・ パンフレット、ポスター、冊子等を制作します	・ 準備段階から、地域女性の意見も大事に聞いて返してやるということによって地域のロコミを高めていく	
	その他広報	・ ホームページの開設及び常時更新を行います	・ 非日常的なよさがありながら敷居が低いという点で意見を聞いてくれるというのは大事	

(様式第4号)

交流・文化施設等運営管理計画検討委員会第2回美術館検討委員会概要

1	会議名	交流・文化施設等運営管理計画検討委員会 美術館委員会
2	日時	平成23年1月28日(金) 午後2時から午後4時50分まで
3	会場	上田市役所本庁舎3階 第一応接室
4	出席者	滝澤委員長、結城委員、小山委員、宮下委員、山崎委員、小林委員、
5	市側出席者	伊藤交流・文化施設建設準備室長、中部文化振興課長、室賀交流・文化施設建設準備室長補佐、若林交流・文化施設建設準備室長補佐、滝澤文化振興課長補佐、小笠原主査、掛川主査、徳田主査
6	公開・非公開等の別	公開・一部公開・非公開
7	傍聴者4人	記者2人
9	会議概要作成年月日	平成23年2月2日

協議事項等

1 開会 (伊藤交流・文化施設準備室長)

2 会議事項

(1) 事業展開、運営管理の基本的方向性について

委員長： 資料1を踏まえて、次第の①のア～オまで一通りご意見を賜りたい。

委員： 郷土作家のどの作家を常設展示的に顕彰展示し、企画展示とするのか議論をしたい。

委員長： 整備計画の議論で、完全に固定された記念室にするのではなく、企画展示室の一部をそうした常設作家の展示に使うこともありうる流動的な形で展示したほうが多くの市民に愛される美術館になるのではないかという議論があったということをお伝えしておく。この件について、ほかの委員はいかがか。

委員： 補足しておきたいが、石井鶴三さんの作品を上田市に寄贈してもらうときの条件に、石井鶴三単独の常設展示をするという条件でいただいているというように聞いているので確認願いたい。

委員長： 専門委員から、石井鶴三、山本鼎等の上田を代表する作家に対して、外から見た視点という意味でいかがか。

委員： 面積が十分あればそれぞれに記念室を作っても良いぐらいだが、財政的にも面積的にも限られてきてしまうのが現実。また、常設展示で固定してしまうと、全館を使って大規模特別展の場合、その部屋は異質な部屋になる。今回の場合は、たとえば、山本鼎を集中的に展示し、その間に石井鶴三の準備をして展示変えをするというサイクルでまわしていくということも考えても良いのでは。

委員： リピートのお客さんに何回も来てもらうというのも目的でもある。作家それぞれが最低何枚かは常設展で見ることが出来き、企画展示をしていない時期を企画展示としての山本鼎というような形で、今度は全部見られるということが楽しみになるような企画展をうまくつけていけば少しは解決できるのではないかと思う。

委員長： 今、山本鼎のおおよその入場者数は。

事務局： 上田城の櫓と同じチケットで入っているのが、年間43,300人ほど。

委員長： 展示できる作品数の10倍以上がなければ展示換えでとても持たないということがある。彫刻は、環境が良ければ常に出しておけるが、スケッチとか写真は、かなり頻繁に展示換えをしなければならなくなる。たいていの人は2度も3度も常設室を見るということがない。偉大な先生方ではあるが全国的に多くのお客さんを動員するのは実際にはなかなか難しいし、むしろ市民の皆さんが使っていく美術館と形で大局的にはならざるを得ないと強く感じている。

委員： 例えば石井鶴三先生の作品はあのスペースだと年間通して展示換えをして、やっと一通り展示できる。そういう点で企画展と併せて、作品を出来るだけ広く見てもらう。

委員： 上田市がこの美術館を作るという一番根底にあるものがきちんと理解されていないというか座っていない気がする。石井鶴三や山本鼎の思想精神を21世紀の現代に再び蘇らせる、その点をお考えいただきたい。

委員長： 現在までおおよその設計や事業方針を進めてきた、そのたたき台になった会議も、そういった日本における近代美術教育の聖地であるという言葉も出た。きちんと顕彰するとともに、その精神をさらに拡大的に事業に盛り込み、広げて行きたいという理念が反映されている。ただ、

それほどのすばらしい作家であり日本における聖地であるこの上田市の上田市民が感じていない。それをどういった形で今後展開し浸透させその精神の波及に勤めていくということを考えていかななくてはならない。

委員： この事業方針、事業内容に出てこない言葉として、調査研究がある。調査研究を館の業務として行う、人を充て、予算を確保するということが出来るかどうか。地に着いた活動をしていくには、館の活動として認めていただかなくてはならない。

委員長： 常設はただいつも同じものだと思っている人が多い。常設とは何かといったときに固定的なものではない、むしろ企画展を生かしていくというようなこともありうるのではないか。

委員： 思想精神を現代によみがえらせる大きな目標に沿って、企画がなされていくと思う。それがこの美術館における企画展を企画していく大きな柱。また、収集ということになると、収集方針を据えないといけないと思う。

委員長： 市の事業方針としては、郷土作家の名前を挙げているが、これに関連したものを調査研究、収集していこうという意図がある。

委員： 今回一番の目的は、郷土の作家を研究し広めていく動きと、開かれた美術館にということは矛盾する場合もある。女性が、美術館に行く理由は、山本鼎の絵を見に行くわけではなく、単に新しいところに行ってみたら良かったということが多い。常にお土産を買うのも女性。開かれて収益性も追求のであれば、女性がたくさん来てくれる美術館にするのが、ひとつの目的。近代美術教育の聖地という理念も守らなくてはならないが、例えば近代教育が今の私たちにどう関係しているかという視点。ミュージアムショップも広げたい、ミュージアムショップ等の収益を収集にまわしたりするために、割り切った設備のほうが、結果的に教育の聖地であることの方に使えるのではないか。

委員： 子どもたちにもわかる、それからお母さんがたも行ってよかったねって思える企画を考えて、学校を通してのチラシ配布、啓発活動、広報活動にも関係していく。冬場は版画の学習が始まっているので関連付けて、教育と関連付けた鑑賞も出来るかなと思っている。

委員長： 美術館の建物とソフトを通じて、市民の皆さんに伝えていくには、発信していかないとどうしようもない。単にハードとしての記念室ということだけではなく、企画展示室、それも狭い意味の企画展示室ではなく、企画展示室も含め重要作家の企画展を行って、教育界も巻き込んで発信していくというような運用の仕方と考えていけば、むしろ立派な、硬い形での常設室よりも良いのではないかと感じている。

委員： 子どもたちのアトリエはなぜ作るのかということになるが、その根底には、自由画教育運動がある。

委員長： 活動方針の中に郷土作家の顕彰、そして常設展示と書かずに郷土作家の顕彰企画展示という標記になっているのは、そういった議論と精神を結びつけたものであると思っている。おおむね皆さんと矛盾しない、問題はこれを如何に運用していくか。

委員： 学芸員的に、全体の中でパーツ分けをしてどこかに力点を置いていく、そういうことをしていかないと、この美術館のこういう点を大事にしてもらいたいということが伝わってこない。

委員： 調査研究をする方にいきなり子どもをつれてきて、説明しろといっても難しい。子どもたちが小口木版とは何なのかを1つ知っただけでも、山本鼎記念館に行ったことの価値であるというぐらい、敷居を下げながら、人材をそろえていく必要を感じている。

委員： 今この場に学芸員が本当はいなければいけない。

委員： どの公立美術館でもそうだが、学芸員は最後に連れてこられる。開館して雇われて、まだ何も見ていないのに説明させられたりすることになりかねない。

委員長： きちんと館として責任もって行く、ということが根幹。まとめると、上田の美術館においては、郷土作家の精神を顕彰しそれを常設展示するとともに、さまざまな活動、企画展とか、山本鼎記念版画大賞等を単にハードに生かすのみならず、ソフトの面で人の配置や活動を含め、郷土の先人の精神を尊重して、活動の核の1つとしていく。ということよろしいか。

委員： (了承)

10 分間休憩

委員長： 企画展示室について、ご意見をいただきたい。何にでも使えるというのは大事なことで、現代美術の巨大なものが置かれても遜色なく、一方で農民美術とかの資料的に見られてしまうようなものも生かせるようなケースも必要。現時点では無個性のほうが良いと思うが、いかがか。

委員： 企画展示室の活用について、市民の皆さんにどんな展覧会をしたいのか、アンケート等で興味を持ってもらうのも良いのでは。ファッションショーが出来るような空間も作っていただきたい。ホールも美術館のようなホール、美術館といっても堅苦しく閉ざされた美術館でなく作っていただきたい。

委員長： 私も賛成で、市民に開かれかつ市民に支持される美術館を作るには、アンケートは必要だと思う。先ほど非日常的な空間が大事だという話もあり、今の話と結びつく。服飾美術館展といったものが出来るような非日常的な空間についていかがか。

委員： 工芸の方向に落として行って、後継者を育てるには、全国に売れるような作品作りをやり、後継者を育てながら新しい工芸も作る、というような欲張った発想を持ってファッションを持っていけたら良い。暮らすこととアートみたいな柱の企画展もたてられるのではないか。

委員長： 学問的には峻別されていたが、日本における工芸は生活と結びついたもので、山本鼎の農民美術における生活と絡むという形では美術館の柱の中に工芸という視点が入っても良いかと思う。広い意味での生活と美術というようなものが目指していければと思っていた。

委員： コーナーにインテリアアートみたいな、インテリジェンスがあって、インテリアにもなるアートみたいなものを一箇所においておくというような、そのくらいのところもあると女性としてはそっちに買い物に来たときに美術館に行く、そのくらい本気でやらないと、集客は難しい。

委員： それはあると思う。子どもに佐久市立近代美術館に行くか、御代田のメルシャン美術館に行くかと聞けば、メルシャンに行くと答える。あそこはミュージアムショップが広く、喫茶店もあり、展示室はそれほど大きくない、外の庭もきれい。企画展示室は、いろいろな夢のような空間を作るためにこそ、何も無いプレーンな空間が必要だということも一方である。しっかりしたプレーンで機能をちゃんと備えた展示室が必要ではないかと考える。

委員： 子どもたちは作品を見てもずっと見ているわけではないので、子どもたちがちょっとした空間があって、美術なり工芸なり郷土の農民美術を子どもは好きかと思う。子どもたちがそこでも飽きない、また行ってみたいというようなスペース、空間を作っていけないといけない。

委員： 金沢 21 世紀美術館は当初から前掛け締めて入れる美術館という敷居の下げ方をコンセプトに掲げ成功した。金沢は現代アートだったので、割烹着と現代アートの落差が面白かったが、今回は、音楽ホールと接しているので余所行きを着て行きたい美術館にしたほうが良いのかという気がする。親しみやすい地元密着型にするのか、おしゃれして行ってみたい美術館にするのか、それぞれお考えいただきたい。

委員長： 子どものためにというときに、野放図に子どもに合わせるわけではない、パブリックな空間はどういうものかということ学んでくるということがある、敷居の低いということは言うのは簡単だが、子どもを尊重するから子どもを大人扱いする、そういった視点も大事。

委員： 女性をどう呼ぶかというのも考えている必要がある。一番信用できるのは地域のご婦人の口コミ、それをどうやって育てるかという、準備段階から、意見も大事に聞いて返してやるということによって地域の口コミを高めていくと聞いた。開館のときにどうやってその魅力をわかってもらえるか、パンフレットだけでなく、少し種まきをしていく必要があると思う。

委員長： シティ雑誌、口コミ紙の人たちと一緒に企画をしたことがあるが、やはり女性がターゲットで、その女性からは意見を聞いてくれるおしゃれな店というのが人気。非日常的なよさがありながら敷居が低いという点で意見を聞いてくれると言うのは大事だと教えてもらった。

委員： 前回示された基本設計の図面ではわからないところだらけだが、美術館は美術館で、ホールはホールで閉じられているので、せっかく一緒にあるのだからもったいない。2 階の部分で美術館から大ホールのホワイエを繋げ広いスペースをとり、その円形の部分にミュージアムショップ、カフェレストランを位置づける。市民ギャラリーの広さは 200 m²ぐらいで、2 階の常設展示の横に持ってくる。一番身近に使い、一番人が来る市民ギャラリーを 2 階に持ってくるとミュージアムショップやカフェが生きてくる。

委員長： 総論はそのとおりだが、県展等の場合の壁延長を最大として想定しておくべきではないか。市民ギャラリーと多目的ルームが広くかつ便利なところにおいてるのは大規模公募展のため、一等地をかつ一番広いスペースを用意していただいているが。

委員： そういう展覧会をやるには、1 階部分のアトリエを展覧会のために使うことが出来る仕様にすればよい。交流というのは円形のスペースを交流のスペースに考えているのかと思うが、これをどのように活用できるか、設計者につめていかななくてはいけない。

委員長： 交流プロムナードを展示室としても使えるようにして欲しいという要望を当委員会でも要望としてでたということにしてよろしいか。

委員：（了承）

委員：今までの検討の中で美術館 2500 m²と決まった時に交流部分で展示スペースをある程度確保するというをお願いしたので、今のようなことが考慮されていると思っている。

委員長：私の聞いているところでも、純粋な美術館でない交流部分も美術館仕様に準じ、100%空調が効くということではないが、子ども全員のものが見たいというときにプロムナードを利用して展示できるので、交流施設に 2400 m²とってあるが、美術館に引き込むことも出来るというように利用していきたい。

委員：基本設計が進み、あまり進んで変更不可能のところまで行って意見を言うのは心苦しい。市民説明会をやって市民の意見を聞くというが、市民の皆さんがいきなり図面、模型を見せられても意見を言えない。設計者は市民の意見を聞いて、納得の出来るものは取り入れ、市民が理解できないことは、理解してもらうまで説明することでない、押し付けられただけと思われ、冷たくなってしまう。

委員長：今回の設計事務所は比較的意见を聞いてくれそうなので、取り入れられるものはどんどん取り入れていければと思っている。大規模公募展の場合はどのくらいの広さがあればよいか、常設展示室や企画展示室を公募展で使わないとすればどのくらい必要か。市民ギャラリーと多目的ルームと場合によってプロムナードの一部を大規模公募展に使えないだろうかという想定で設計されて、今のところ市民ギャラリーと多目的ルーム併せて 700 m²ほど確保してある。

委員：図面を見ても具体的にはわからない。ここがパネル立てられるのか立てられないのか。

委員長：数百点の作品が並ぶといったことを想定して、大きな壁が動いてくるような空間として多目的ルームと市民ギャラリーは設計しないと困る、という話は伝わっている。

委員：玄関の間口はこれでいいのか、入って正面が廊下なのもつまらない。玄関はお客さまを呼ぶところなので、少し考えていったほうがいいと思う。

委員：上田の人にとっての玄関は駐車場側のエントランスが玄関だと思うが、大ホールに 1700 人ということになると、軽井沢とか東京から来るとしたら、玄関は小ホール側プロムナードの入り口だと思う。

委員：美術館は美術館で閉じられていて、ホールはホールで閉じられているのではなくてその 2 つを繋ぐ広い空間があると、どこから入って来ても良い所になる。

委員長：2階をプロムナードのホールと美術館を繋ぐことは必要。

委員：この図面で見ると、物理的には可能。

委員：具体的なことを出すのではなく、要望を出していったほうが、結果的に美しい可視スタイルが生まれるのではないかと。

委員長：いずれにしても、プロムナードをホール側の意見も含めて、うまく使っていないと税金の無駄遣いといわれるので、これをどう生かすかというのも、われわれの課題でもある。

委員：工芸品をみんなで1週間とか即売会、青空市みたいに市を立てたりできる。

委員長：設計者もそれは考えていると思う。美術館のほうで積極的に使っていきたい。美術館として使うとしたら、少なくとも一方はある程度の壁面は必要。交流プロムナードをフルに活用して、可能であればホールと美術館を階段とを上下せずに繋ぐということは検討に値するということで、意見としてまとめていきたい。

委員：（了承）

委員長：大規模展が出来る面積は、ホールと展示の複合施設である県伊那文化会館に勤めていたころは、600 m²強にパネルを立ててぎりぎり県展が収まった、そうすると、700 m²の多目的ルームと市民ギャラリーはぎりぎり収まるのではと感じているが、東信美術展等はどうか。

委員：伊那文化会館での県展は壁面が少ないために全部 2 段掛けなので、面積というより壁面が 350~400 メートルぐらい必要。そういう点から考えて、今のようなプロムナードを使えば可能。野外展示場も展示を出来るような工夫がされているので、県展の一部はそこにいくということも考えられていると思う。

委員長：市民ギャラリーと多目的ルームは、大規模展をやると当然接していたほうがいいという意見があり、搬入等の実用的な視点から使いやすいようにという視点。玄関を何とか工夫すれば、市民団体の皆さんからすれば使いやすいほうが良い。

委員：ホールと美術館を繋ぐ 2階を作ったほうが良いというのも、2階が出来ると見栄えは 2階が無いほうが良くなる。どっちをとるか。

委員長：建蔽率、延べ床面積の問題があるので、どこかを削らなくてはならなくなるかもしれない。

委員：リハーサル室は展示に使えるようにならないか。

委員長： それを考えるなら、プロムナードを使えるようにしたほうが良い。リハーサル室は美術館から離れているので、見に行ってもらえない。交流プロムナードを美術館仕様に近い形で、全面的ではないが、8mの幅の部屋はかなりのものが飾れると思う。関連して、人事・組織について、館長を共通の館長を1人置くところがあるが、それについてはいかがか。

委員： 島根のグラントワの館長は1人。こんな小さな美術館で館長がいるかどうか。

委員： 水戸美術館も1人。

委員長： ホール美術館が一緒のところがあり、館長が2人いて、その上に総長がいて、非常に使いにくいという話だった、時代にも逆行する。規模からしても館長がホール側になる可能性が高いと思うが、問題ない。ここで意見を集約する意図は無いが、場合によっては館長は1人でも美術館側はよいと言うことで現時点ではよろしいか。

委員： (同意)

委員長： 本日のまとめをすると、前半が地域の代表的な作家の顕彰をきちんとしていく。そしてその精神を生かす形で企画展その他、公募展等を含めて、具体的には山本鼎版画大賞のような、そういったさまざまなソフト面での活動を通して山本鼎ほかの精神を全国に発信していく活動をこの建物の中に生かして行きたい、ということ。後半は、開かれた敷居の低い美術館ではあるが内部は背筋を伸ばしたいような、非日常的な空間にもなりうる多目的な空間を企画展示室として生かしていく。工芸等生活に密着した美術もそういった精神を生かして展開していく。

建物については、可能性として、ホールと美術館がもっと有機的につながるようなもの、例えば、2階をつなげたようなものが出来ないか、というような提案をしてみる。市民ギャラリーや多目的ルームをもって大規模展に対応していくが、できるだけ交流プロムナードも展示空間として生かして大規模展にも対応して行き、市民の皆さんの作品を気軽に見てもらえるような空間として生かしたい。組織としては、館長は軽くして、実働的なところに力を入れて行きたい。というのがおおよその方向としてよろしいか。

委員： (同意)

(2) 委員会の開催予定について

事務局： 第3回美術館検討委員会は2/10(木)午後1時30分からとしたい。

委員： (了承)

(3) その他(なし)

6 閉会

* 会議概要は原則として公開します。会議終了後、1週間以内に行政改革推進室へ提出してください。

* 非公開及び一部非公開としたものについては、その理由を記載してください。

近隣各館のイベント・ワークショップ等

参考資料①

信濃美術館

名称	開催日	講師	内容
没後100年 荻原守衛(碌山)展関連イベント	スペシャルギャラリートーク(作品解説会)	H23.2.5 小泉晋弥氏(茨城大学教授)	荻原守衛没後の日本彫刻界の流れを中心にお話いただきます
		H23.2.19 武井敏氏(碌山美術館学芸員)	荻原守衛のひとと芸術を中心にお話いただきます。
	ギャラリートーク	H23.2.12・26・3.5 当館学芸員による	
	ワークショップ「彫って、くっつけて、彫塑に挑	H23. 2.20	石鹼と粘土を使って、「彫る＝彫刻」と「くっつける＝塑像」を体験しよう！
やねうら美術館講座	「光の筆で絵を描こう！！」	H23.1.29 信州大学教育学部美術専攻デザイン分野 蛭田直	年間テーマを設け、「美術は苦手」という人にも美術のおもしろさを体験していただける講座を開催しています。今回は、光の筆で暗闇に絵を描くよ。作品は持ち帰ることができます。
	影で時間を切りとろう！！」	H22.12.4 浅見俊哉(あさみしゅんや)さん(美術作家・中学校教諭)	自分の影、モノの影、影はモノと光のある所に必ず生まれます。しかしその影は決して同じ形を維持するわけではありません。一瞬一瞬に生まれる影を特殊紙に写し取ってみましょう。
	長野の街をフォトモで切り取ろう	H22.11.7 美術家・写真家 糸崎公朗	今回は「フォトモ」の考案者である美術家であり写真家の糸崎公朗さんを講師に招き、長野の街のお気に入りの風景を撮影し、街の風景をフォトモにします。フォトモとは写真(フォトグラフ)を切り抜き、模型(モデル)のように組み立てた、まさに「ホントウに飛び出す」立体写真です。
	信州の揚げ物フェア	H22.8.3	画材でコロッケやフライを作ってみよう！野沢菜コロッケ？信州サーモンフライ？
	おひさまモビールをつくらう	H22.8.5	影をどンドン切り抜いて自分だけのモビールをつくらう！
	東山魁夷の絵に挑戦！	H22.8.7	デジカメを使って東山魁夷の構図を体験しよう！
	カメラをつかって探検だ	H22.7.10 東京工芸大学芸術学 科講師 圓井義典先	カメラの原理である“カメラ・オブスクラ”をつかって、美術館の中を探検しよう！手づくりカメラのレンズを通して、お気に入りの風景を見つけてみよう！
美術館でおしゃべりしよっ！2010	H22.11.13～ H23.1.11	スタッフがナビゲーターとなって、作品について会話しながら作品鑑賞を行なうギャラリートัวร์	
学芸員による対話型ギャラリートーク「おしゃべりさんぽ」(対話型ギャラリートーク)	東山魁夷館常設展Ⅱ「絵のなかのリズム」	H22.6.19・20	「美術館は静かにしなければいけない所」というネガティブなイメージをお持ちのあなた、「作家や時代背景の知識がないから美術はわからない…」と苦手意識をお持ちのあなたに、東山魁夷館展示室において学芸員と一緒に、東山魁夷の作品について、あれこれ、おしゃべりしてみませんか？作品をみて、ふつふつと沸いた疑問や感想を、自分の心に閉まわずに、ほかの誰かに語りあってみると、「やっぱり」と共感できたり、違う見方を知って新たな発見ができたり、想像がぐっとふくらんで、もっと作品を楽しむことができるはずです。ぜひ、「おしゃべりさんぽ」にお気軽にご参加下さい。
	東山魁夷館常設展Ⅰ「魁夷がみつめた四季」	H22.5.15・16	
おでかけ美術館展			当館では、美術館を訪れる機会の少ない児童・生徒を対象に、美術の楽しさを体験してもらう出前講座「おでかけ美術館」を行っています。平成15年度から長野県立こども病院、平成16年度から信州大学付属病院の院内学級(※)で、なかなか院外に出られない子どもたちへ美術館職員が持参する(季節に合わせた)東山魁夷作品(版画)を子どもたちが鑑賞し、その体験をもとに作品を制作する活動をしています。今年度は、当館で実施した講座(そっくりだけどにせもののパフェを作るなど)を、東山魁夷以外の美術講座も実施してきました。平成18年度からは、長野県長野養護学校、長野県長野ろう学校、平成20年度からは長野県松本盲学校にも出向き、美術を五感で体験してもらう出前講座を行っています。この「おでかけ美術館」を通して、多くの子どもたちが自由に美術を楽しんでもらう活動を広げ、継続していきたいと考えております。
おもしろ美術講座		長野県信濃美術館職員	学芸員が長野県内の各市町村の学校や公民館に出向いて出張講座を行います。美術作品やスライドなど画像を当館職員が県内の施設に持参し、美術のおもしろさを味わっていただくことを目的とした講座です。子ども用として制作をとり入れた講座も用意しています。

松本市美術館

名称	開催日	参加者	講師	内容	ねらい・備考
子育てパパ・ママの美術鑑賞日				子育て中のパパさん・ママさん、美術館でほっと一息しませんか。保育士がお手伝いします。	
銅板画基礎講座(初級編)	H18.9.10~24 全3回	11名	渡辺達正(多摩美術大学絵画学科版画科教授)・銅の会	ドライポイント、エッチング、石膏レリーフ刷りの技法を学びました。	開館当初より、当館の版画室を利用した特色ある講座として開催している専門性の高い人気講座です。今回は、以前講座に参加された受講生からなる「銅の会」の方々に運営協力していただきました。
《松本市美術館映画会&ワークショップ》 みんなのムービー「アニメーションのしくみ」	H18.11.12	45名	松本CINEMAセレクトのみなさん	アニメーション作家山村浩二氏が挑んだ意欲作「年をとった鱈」ほか世界中からセレクト多彩なアニメーション8本を鑑賞後、絵が動いてみえる仕組み(残像現象)などを、簡単な紙工作などから学びました。そして、一人1.5m程度(約24コマ)の映画フィルムにそれぞれが絵を描き色を塗り、みんなのものを繋げて大画面に上映してみました。その出来栄は、スピード感あふれる抽象画のようで、思わずみんなから拍手が起こり大満足！リュミエール兄弟の映画を初めてみた人の感動もこんな感じだったのではないのでしょうか。	映画(動くアート)の魅力を単なる娯楽(エンターテイメント)としてではなく、文化(カルチャー)として理解していただくため、松本CINEMAセレクトのみなさんとの連携により、親子で楽しめる映画会とワークショップを開催しました。
土曜クラブ「美術館に自分の基地をつくらう」	H18.11.18	小学生と保護者40名	藤田英樹先生(信州大学教育学部助教授) 信州大学教育学部美術教育分野学生のみなさん	自分が入れるような大きな基地を兄弟や家族、友達同士3、4名のチームで協力して制作。木の端材を素材に、グルーガンを用いて接着していきまし。ベースには90cm位の立方体の木枠を用意しました。はじめは各チームのものを合体させて一つにしようと考えていましたが、それぞれの基地が増殖し巨大化したため、一つ一つに存在感があり、個々に展示することになりました。	この講座は、子どもたちや親子を対象に、家庭や学校では出来ないスケールの大きな造形活動から、ものづくりの楽しさや、思いがけず出来上がっていく形の不思議、組み上げつなげ、空間に広がる造形の魅力を体感することを目的に行いました。
土曜クラブ「自分の帽子をつくってみよう！」	H18.6.3	小学生16名	百瀬陽子(服装デザイナー)・上原和佳(服装デザイナー)	フェルトなどのやわらかく、やさしい素材をつかってオリジナルの帽子をつくってみました。	土曜クラブは、素敵なおそびの中から、美術に親しんでいただく教育普及事業です。
土曜クラブ「流木をつかってオブジェをつくらう！」	H18.7.8	31名	中村石浄(松本市美術館友の会)、松川幸寛(松本短期大学教授) 松本短期大学学生、東京電力株式会社の指導:大島武・大島浩(松本市美術館学芸員) 山口昇一(神林子ども会育成会長) 博物館実習生: 櫻井涼(実践女子大学) 柳沢葉子(松本大学) 澤口未央(成安造形大学)	友達や家族などグループで流木をつかって大きなオブジェを制作し、美術館に展示してみんなにみてもらおう。	美術館に親しんでもらう教育普及事業として、園児から大人までを対象とした実技系ワークショップを実施。
おでかけ講座「墨を楽しもう！」	H18.8.5	小学生12名	大島武・大島浩(松本市美術館学芸員) 山口昇一(神林子ども会育成会長) 博物館実習生: 櫻井涼(実践女子大学) 柳沢葉子(松本大学) 澤口未央(成安造形大学)	・松本市美術館の職員が向ういて、お子さんや親子で墨の楽しさを体験してもらってワークショップとして実施しました。 ・前半のうちわへのマーブリングでは、墨の動きやインクの出し方によって不思議な模様は浮き上がり、オリジナルのうちわが出来上がりました。 ・後半のプロッターージュでは、視点を重視し、屋外や公民館の内部の不思議な凸凹や模様を発見してもらいました。 ・マンホールや車のナンバープレート、コンセント部分や畳の目、葉っぱの葉脈、サイン表示などを、本格的な拓本用墨で擦り出しました。 ・はじめての育成会との共催事業として実施しました。 ・おばあちゃんとお孫さんが一緒に参加されたご家族もありました。	特別展「書 壮心やまず 上條信山 生誕百年記念展」にあわせ、出身地の神林地区において育成会との共催により、出張講座を開催いたしました。

佐久市立近代美術館

名称	開催日	参加者	講師	内容	ねらい・備考
佐久平の美術展	H19.2.24～3.11			佐久平の美術展は、長野県東信地方限定の公募展。伸びゆく佐久平の芸術文化の創造に資するため、地域の美術愛好者を対象に毎年開催。佐久平の美術文化の実情を正確に把握、評価し、今後の美術館の活動に役立てていきます。作品の受付搬入は毎年1月頃、公募作品のうち審査による入選作品と特別出品(審査員作品など)による展覧会は2月頃開催しています。佐久平の美術文化の動向を展覧会でご覧ください。作品の応募もお待ちしております。	
佐久市児童生徒写生会	H15.10.4	75		「のびやかで情操豊かな人づくり」は、佐久市教育の願いです。みなさんが、恵まれた郷土の自然や風情に絵をとおしてかかわりを持つことは、成長していくうえでとても大切なことです。駒場公園や長野牧場で秋の一日を、佐久市じゅうの子もたちがみんなで集まり写生をして、新しい美しさを発見しましょう。佐久市教育委員会と学校の先生方は協力して、長野県駒場公園および家畜改良センター長野牧場(佐久市大字猿久保)を会場に、毎年10月上旬、児童生徒写生会を開催しています。お友だち、おとうさん、おかあさんと相談して、みんなで参加して楽しい一日にしてください。	
児童生徒作品展	H16.2.18～2.29	252		平成15年度の写生会75名の参加者のうち入選作36点と、学校から216点の作品を展示して、平成15年度第11回佐久市児童生徒作品展を開催します。作品ひとつひとつの個性的な輝きが、会場の野沢会館市民ギャラリーをみんな色の楽しい空間にしています。	佐久市内の小中学校の児童生徒のみなさんは、学校の授業でどんな絵を描いているのですか。佐久市児童生徒作品展は、みなさんが制作した作品を集めてみんなで鑑賞するための展覧会です。展示する作品は、「佐久市児童生徒写生会」における入選作品と、みなさんが学校で制作した作品から佐久市学事委員会巡回展図工美術委員により選出された作品で、毎年2月頃開催しています。「また創りたくな
展覧会ガイドツアー	H22年度11回予定				
新収蔵品展アーティストトーク	H22.9.20		小清水 漸(彫刻家・元京都市立芸術大学教授)		
トワイライトギャラリートーク	H22.7.31・8.28				
まちじゅう美術館				近代美術館に所蔵している作品の一部を公共施設に展示し、広く市民の皆さんに親しみながら鑑賞していただく。展示場所は、勤労者福祉センター・浅間病院・佐久情報センター・野沢会館・シルバーランドみつい・シルバーランドきしの・コスモホール・あいとぴあ田田・交流文化センター浅科・駒の里ふれあいセンターの10箇所。	佐久市と佐久市教育委員会は、平成14年度より、佐久市立近代美術館の収蔵資料等を、市内の公共施設で展示公開する「まちじゅう美術館事業」を実施しています。美術作品に触れ合う機会を供与し、人の集まる環境を演出します。

世田谷区「美術鑑賞教室」・美術館ボランティアについて（世田谷美術館 HP より）

美術鑑賞教室とは？

世田谷美術館は1986年の開館以来、区立小学校（全64校）4年生、中学校（全32校）1年生の来館を受け入れてきました。「美術鑑賞教室」というこの事業は、世田谷区教育委員会の主催で始まったものです。世田谷美術館が身近な場所に感じられるように、との願いをこめて、毎年8000人に及ぶ子どもたちを迎えています。

小学校の「美術鑑賞教室」は学校行事で、1日に2校が来館します。子どもたちには『美術鑑賞ガイド』、先生方には『子どもと美術を楽しむために』というパンフレットが事前に配られています。

中学校の「美術鑑賞教室」も学校行事でしたが、1998年度より団体来館から、個人単位の来館に変わりました。生徒たちには『鑑賞の手引き』という小冊子が事前に配られています。

来館前のサポート - インターンによる出張授業

子どもたちが美術館を訪れるのを楽しみにしてくれるようにと、当館では1996年から「美術鑑賞教室特別プログラム」という出張授業を、希望校むけに始めました（小学校のみ）。出張授業を行うのは、当館の「インターン」（特別に長期の博物館実習を受ける大学生）たちです。

インターンは担当学芸員とともに授業案を練り、先生方と入念に打ち合わせした上で、各校で45～90分の授業を行います。一つの作品をじっくり見る授業、作品の制作方法を体験する授業、作品から出発して表現活動を展開する授業など、毎年多彩なプログラムが展開しています。

来館時のサポート - 「鑑賞リーダー」による案内

来館時に子どもたちを待ち受けるのは、ボランティアによる「鑑賞リーダー」です（現在は小学校のみ）。子どもたちを少人数のグループに分けて案内します。展示会場では、作品に対する子どもたちの素朴な疑問や鋭い指摘をうけとめながら、いっしょに作品の魅力を探ります。図書室や区民ギャラリーも見学する、約90分のツアーです。

鑑賞リーダー制度は1997年に発足し、当館の年間講座「美術大学」の修了生、「美術館友の会」会員、博物館実習生など、毎年100名前後が活動しています。登録して研修を受ければ、どなたでも活動できます。

区内小学校に限らず、各種学校団体の来館時には「鑑賞リーダー」による対応が可能です。詳細はお問い合わせください。

美術館ボランティア

鑑賞リーダーと一緒に美術館を楽しもう！

来館した幼児から高校生までのグループのリーダーとなって、展覧会や美術館の案内をするのが、ボランティアで活動している、鑑賞リーダーたちです。

5人以上のグループで美術館にいらっしゃる時は、鑑賞リーダーの案内を予約することができます。詳細はご希望の日程の一週間前までに、お電話で美術館教育普及課へお問合せください。

活動

来館した幼児から高校生までの児童、生徒のグループ（1グループ5人～8人程度）のリーダーとなって、展覧会や美術館のご案内をします。ご希望があれば、親子連れや大人のグループも受け付けています。

年間50～60回程開催される鑑賞教室及びミュージアム・ツアーで、毎年約1000人の方が活動しています。登録者は美術館の講座修了生、友の会会員など、地域の方々が中心です。

基本姿勢

こどもの数だけ作品の見方がある。知識を教えるよりも、こどもたちの感動に耳を傾ける。

役割

(1) 子供たちに美術館を好きになってもらう。

※生まれて初めて美術館に来る子供たちを前提として、美術や美術館に興味、親しみを感じてもらうことを目的としているため、この活動では作品解説に重きをおいていません。リーダーには、子供たちに作品を見るよう促すこと、また、子供たちの話を聞いてあげることをお願いしています。

(2) 子供たちに美術館のマナーを知ってもらう（作品を傷つけない、他の鑑賞者に迷惑をかける等）。

（活動条件）美術館が好きで、世田谷美術館に親しみのある方。募集随時。登録は年度更新。ご興味のある方は、当館教育普及課までお問合せください。見学もできます。

登録者対象に年10回程程度の勉強会を開催します。また活動のある展覧会については資料とチケットを2枚配布します。なお、展覧会図録や交通費等の支給はありません。

学校行事

世田谷区立全小学校4年生（約5000名）の学校行事。来館の際、こども5人から10人のグループを1人から2人のリーダーが担当します。

ミュージアムツアー

小中学生を中心とした一般対象

(1) 春休みなど、期日、期間を決めておこなうツアー。また、夏休み中は展示室内に常駐します。

(2) 学校や絵画教室などの団体来館のサポート。希望があればバックヤード見学や簡単なワークショップもおこないます。5人以上で要予約（大人のグループも歓迎します）。

(3) 目のご不自由な方の鑑賞サポートも承ります（要予約）。

グラントワボランティア会とは



グラントワボランティア会は、島根県芸術文化センター「グラントワ」が行う文化事業を支援し、同時に会員個々が生きがいを得ることを目的として活動しています。

自分が「できる時間帯でのボランティア活動」を私たちと一緒にしてみませんか？活動数をポイントとして貯め、特典としてご利用いただけます。

グラントワ・ボランティア会組織

ボランティアグループ

活動内容

映画	映画の企画・運営
イベント	芸能・音楽・演劇等イベントの企画・運営
ワークショップ	劇場の企画関連イベント(舞台塾や子供たちの活動プログラム等)の支援
(1)劇場	
プ	
(2)美術館	美術館の企画関連イベントの支援
フロント	大・小ホールのロビー・客席の案内等
ギャラリートーク	美術館収蔵品展のギャラリートーク
クリーンアップ	グラントワ周辺の除草等清掃作業
生花	館内の生花、花材の提供
発送	グラントワ関連の印刷物の発送作業
情報発信	「応援団通信」、「ボランティア通信」の編集、広報(HP)、新聞のスクラップ等

ボランティアグループ	人数	活動日	活動場所
イベント		公演日、企画会議日等	グラントワ講義室・ボランティア室、大・小ホール(公演日)
劇場ワークショップ	9名	劇場事業の舞台塾や子供たちの活動プログラム開催日	グラントワ内施設他、必要な場所
美術館ワークショップ	14名	教育事業開催日	グラントワ内他、必要な場所
フロント		劇場の自主事業開催日に活動 月1回研修実施	大・小ホール

ギャラリートーク	11名	美術館オープン時間（美術館学芸員との打合せによる時間帯）	美術館コレクション展示館内
クリーンアップ	16名	毎週金曜日（会員個人的）、第4金曜日午前中（会員全体活動）	グラントワ周辺
生花	9名	毎週、火曜日・金曜日 18:00～	グラントアボランティア室、回廊周辺・館内のトイレ約40箇所に生け花。
発送	49名	毎月28日に友の会員（3,200通）、3ヶ月毎パスポート会員等発送（5,000通）情報誌等の発送作業、	グラントワ講義室・ボランティア室
情報発信	9名	毎月第1、第3火曜日 18時～	グラントワボランティア室

子どものアトリエについて

運営理念

子どものアトリエは、「『美術館は大人が利用するもの』という常識を越え、子どもたちが美術に接し、体験的に学べる施設を提供し、子どもたちが自分の力で豊かに素直に成長していく手助けを行くことを目的として設置される。」また学校教育との関連において、「学校ではでき得ない、また画一化されない形での体験を通して、生活全体に係わる関心を引き出すような活動が望ましい。」という美術館設計条件研究会の報告書(1983年(昭和58年)4月9日)を受け設置され運営しています。

利用対象については、4歳から12歳までの幼児および児童を原則としていますが、現在、4歳以下の未就園児や中学校の養護学校にまでその利用が広がり、当初の計画とは若干違った展開をみせています。

日本では、明治初頭より、子どもの美術教育は学校で指導するという長い歴史がつづいていますが、その目的は、義務教育全体の目的である「自立に必要な基礎的な能力の育成」にあります。子どものアトリエが行う描きつくり鑑賞する活動も、「芸術家の育成」ではなく、「自分の目で見て、自分の手で触れ、自分でする」という自意識の獲得に目的があり、それを楽しい活動として提供するのが私たちの仕事です。

ゆえに子どものアトリエでは、美術的な教養として、子どもたちにいろいろな作品の作り方や作家を知ることなどを性急に求めることはしていません。むしろ、子どもたちの意志的な問題として、見たくなるような、知りたくなるような、コンディションづくりが大切であると考えています。生涯を通した中で美術館との関わりを考えると、子どもたちはその入り口に立ったばかりです。子どものアトリエはその入り口の案内役として、子どもたちにとって美術館が楽しくかつ親しみのある場になるように、事業運営を心掛けなければならないと考えています。

事業内容

親子のフリーゾーン

「ねんど」「えのぐ」「かみ」などの基本的な材料を使い、親子で楽しめる造形広場です。日曜日の朝10時から11時半までのプログラムで事前の予約はいりません。12歳までのお子さんとその保護者の方が対象で団体の利用はできません。(開催のない日曜日もあるので事前の確認が必要です。)

個人の造形講座

個人を対象とした造形プログラムで、参加対象を[幼児][小学1・2・3年生][小学4・5・6年生]に分け、年間を通じてさまざまなプログラムを開催しています。いろいろな素材や方法を紹介し、それぞれの子どもたちが楽しみながら身につけられるよう指導します。

講座の種類は各月ごとに行われる「わくわく日曜造形講座」2ヶ月にわたって行われ

る「長期日曜造形講座」夏休みに行われる「夏休み造形講座」、年に6回祝日に行われる「一日（祝日）造形講座」があります。（事前申し込み制、有料講座）

学校のためのプログラム

子どものアトリエが横浜市内の小学校、幼稚園・保育園、特別支援・養護学校などと連携をして行うプログラムです。年間90日、子どものアトリエの施設の中で造形活動や鑑賞を中心としたプログラムを開催しています。（事前申し込み制）

教師のためのワークショップ

子どものアトリエでは、教師やそれを目指している人たちを対象に「子どもの育ちを造形活動を通して考える」ことを目的とした研修を行っています。2日連続の「春期講座」「夏期講座」があります。

子どものための展覧会

子どもたちの造形に対する興味や“ やってみたいくなる気持ち” を育むために、年間を通じてさまざまな素材や表現を紹介するミニ展覧会を行っています。場所は子どものアトリエ内のミニギャラリーです。「親子のフリーゾーン」や「学校のためのプログラム」で来館の際にご覧いただけます。

（一般公開はしていません。）

手でみるギャラリー

子どもは触ることがいちばん確かな情報となります。横浜美術館では「触ってもいい」彫刻作品6体を子どものアトリエ入口横の回廊部分に設置しています。